

## 詩篇114篇

〔ハレルヤ〕 113:9f

《出エジプトと十二部族》

- 1 イスラエルがエジプトから、ヤコブの家が異なることばの民のうちから、出て来たとき、
- 2 ユダは神の聖所となり、イスラエルはその領地となった。

《紅海横断とヨルダン渡河》

- 3 海は見て逃げ去り、ヨルダン川はさかさに流れた。
- 4 山々は雄羊のように、丘は子羊のように、はねた。
- 5 海よ。なぜ、おまえは逃げ去るのか。ヨルダン川よ。なぜ、さかさに流れるのか。
- 6 山々よ。おまえはなぜ雄羊のようにはねるのか。丘よ。なぜ子羊のようにはねるのか。

《力ある神》

- 7 地よ。主の御前におののけ。ヤコブの神の御前に。
- 8 神は、岩を水のある沢に変えられた。堅い石を水の出る泉に。

114 篇を「ハレルヤ詩篇」（111～118 篇）の一つに数えるならば、113 篇の最初と最後に出てきた「ハレルヤ」の後者をもらってもよいかもしれません。

本篇に出てくる表現は詩的で暗示的なものばかりですが、旧約聖書に親しんできている読者にはこれが出エジプトと関連する内容であることが読み取れるでしょう。

1～2 節：エジプトでの奴隷生活から解放されたイスラエルの民

3～6 節：モーセが紅海を分けた出来事／ヨシュアがヨルダン川を堰き止めた出来事

1～2 節の中ではいくつかの特徴的な表現が出てきます。エジプト人のことを「異なることばの民」と言っていますが、これは他に例を見ない珍しい表現です。ヤコブの息子たちが飢饉のときにエジプトを訪問した際、言葉の壁を感じていたことが分かる記事があります（創世 42:23）。ヨセフがエジプトの宰相となっていたことを知らずに食糧を求めてエジプトを訪問した兄たちは、ついにヨセフと和解し、一族総出でエジプトへ移住することになりました（創世 46 章）。聖書には書かれていませんが、このときイスラエルの民がエジプトの地でスタートした生活において、最初に最も困ったのは言語の問題だったと思われます（古代エジプトの公用語はエジプト語）。まず異国の言葉を勉強し、日常的に使えるようにならなくては、買い物すらできません。その国の法的文書を読めるようにならなくては、容易に騙されてしまうでしょう。430 年という期間を生き延びるには、まず言語の習得を余儀なく

されたはずで。そして、移住二代目以降になると、バイリンガルであることが普通になっていったことでしょう。そのような「言葉の壁」から解放されたとき、イスラエルの民は大きな自由を実感したと想像します。

2節で「ユダは神の聖所」「イスラエルはその領地」と言われているところから、何となく分裂王国時代を連想する人も多いかもかもしれません。しかし、ここでは「ユダ」と「イスラエル」は単なる言い換えであり、民全体を表していると理解してよいでしょう。確かに、ユダは民全体の中で指導的な立場を取り始めていましたから、ユダ部族を中心とするイスラエル民族のイメージが既にできていたと考えることもできます。

3～6節には、「海」「川」「山々」「丘」と、自然界を表す用語が多く出てきます。ここには全世界を統治しておられる神の権威が表されています。

「海は見て逃げ去り」（3節）とは、イスラエルの民がエジプト人から逃走しているとき、モーセが紅海を分けて渡らせた出来事（出14:15-31）を表しているでしょう。また、「ヨルダン川はさかさに流れた」とは、約束の地に入るときヨシュアがヨルダン川を堰き止めて民を渡らせた出来事（ヨシュア3章）を表しているでしょう。更に、「山々は雄羊のように、丘は子羊のように、はねた」（4節）とは、シナイ契約のときに山が地震で揺れた様子を表していると思われます（出19:18「全山が激しく震えた」）。

5～6節では、これらの出来事が改めて思い起こされ、神の御手に抗うことのできない被造世界の従順が強調されています。

余談になりますが、近年「気象操作技術」というものが著しく進んできていると言われています。1976年に実施された第31会期国際連合総会議では、地震や津波を人工的に起こしたり、台風やハリケーンの進行方向を人為的に変える技術を持ったとしても、軍事のために使用してはならないという世界的な協定が結ばれました。しかし、この協定は実質的に無視されており、先進諸国では「見えない戦争」の道具として既に使用されているようです。例えば、ベトナム戦争のときにはアメリカが雲を生成する成分を空中散布して降雨量を増加させてモンスーンの時期を長引かせたとか、同じ技術をキューバで用いてサトウキビの収穫量を減少させることに成功したとか、2008年には中国が人工降雨計画に成功し、北京五輪の開会式前にヨウ化銀を空に散布して雨を降らせたとも言われています。ここまで来ると、人間が行なっていることは自然界を司る神への挑戦と言えないでしょうか。人の手による操作が気候変動に甚大な影響を及ぼしている可能性があります。人類は本来の自然界の主はその主権をお返ししなくてはなりません。

7～8節は結びとなりますが、8節を読むと神が自然界を通してご自身の民に常に良き業をなさろうとしていることが分かります。荒野のような地を「沢」「泉」となし、彼らの渴きを潤してくださいました（出17章、民数20章）。紅海を分けた出来事やヨルダン川を堰き止めた出来事は、神の力を表しています。この力ある神を憶え、「地よ。主の御前におのけ。ヤコブの神の御前に」（7節）と自らの心に呼びかけたいと思います。